

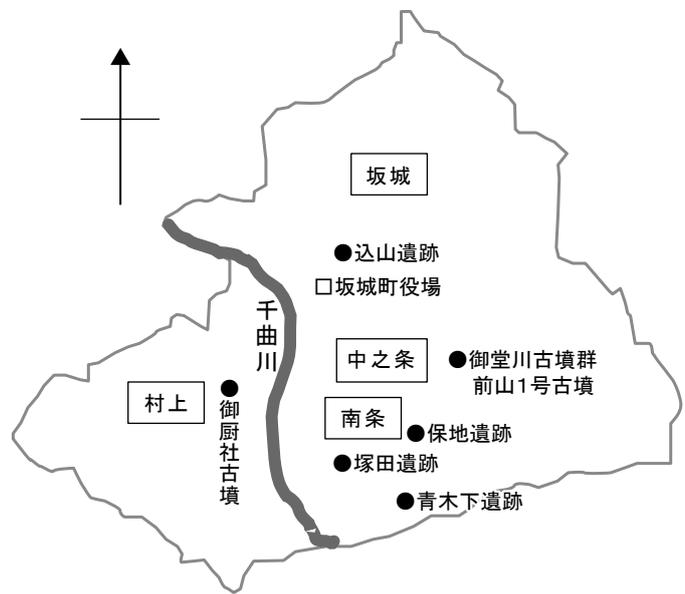
IV 郷土の歩み

1 遺跡の豊かな郷土

わたしたちの住んでいる町には、昔から多くの方が生活していました。その人たちが残したものを遺構や遺物と言います。遺構は昔の人たちが地面に残した跡を言い、遺物は土器や石器などのように使われた道具のことを言います。町内には遺構や遺物が見つかる場所が多くあります。そのような場所は遺跡と呼び、原始人や古代人が住んだ竪穴式住居、寺や墓、水田などの跡と思われる。

今、わたしたちはそのころのことを実際に見たり、聞いたりすることができません。しかし、これまでに行われた発掘調査などによって、町内には多くの遺跡があったこと、当時のこの地域は住みやすく、重要な意味を持った場所であったことなどが、少しずつわかるようになってきました。

南条地区の保地遺跡から見つかった石器は、ここが町内でもっとも早く、人が生活していた場所であることを物語っているようです。それは、今から約1万5千年前ごろでしょうか。もしかしたら、ナウマン象のような大きな動物を追いかけてきた旧石器時代人が、ここへやってきた証拠かもしれません。



『1 遺跡の豊かな郷土』で出てくる遺跡の位置

(1) 縄文時代の遺跡と墓

現在、町内で縄文時代の一番古い住居の跡とされているのは、坂城地区の込山遺跡で見つかった住居の跡です。込山遺跡は坂城保育園の建設によって発掘調査されました。見つかった住居の跡は縄文時代の前期ごろのもので、今から約6000年前と考えられています。このほか縄文時代の遺跡は、坂城地区の和平高原や平沢のように標高の高いところや、南条地区の金井などが挙げられます。しかし、土器などが見つかっただけで、発掘調査はまだ行われていないので、詳しいことはよくわかりません。

右の写真は、町内で見つかった約3000年前の縄文時代後期ごろの墓から出土した縄文人の骨です。この墓は二人を埋葬した後に、何人かの頭蓋骨を後からいっしょに埋めた大変めずらしいものでした。



埋葬された縄文人

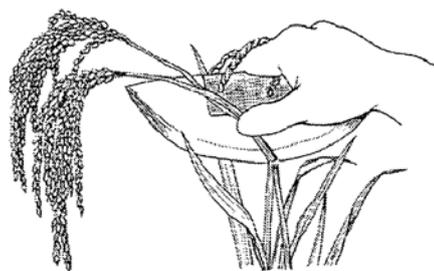
下は男性ですが、上は女性とされます。この男性はヒスイ製のペンダントをつけたまま埋められていたことから、ムラ（小さな村のことで、以下ムラと書きます。）の中で中心的な役割をしていたおじいさんと思われます。いっしょに埋まっていたのは、おばあさんと考えられています。亡くなった二人が足を伸ばした状態で、仲良く埋葬されているのがわかります。そのほか、発掘調査では多くの縄文土器、弓矢の先につけたやじりや斧などの石器が見つかり、当時の人々は、弓矢を使って狩りをしていたことがわかりました。しかし、縄文人は狩りによって動物を獲るだけでなく、きのこやどんぐりなどの木の実を採集したり、千曲川に上ってきた鮭などの魚を食べたりして、定住生活をしていたと考えられています。

(2) 塚田遺跡の弥生人

稲作は九州など一部の地域で縄文時代から始まっていますが、稲作を中心とした生活を行うようになったのは、弥生時代に入ってからのことです。

人々は千曲川が氾濫したときに土砂が堆積してできた小高い丘である自然堤防の上などにもムラを築くようになりました。

塚田遺跡（南条の塚田工業団地）では、邪馬台国の女王卑弥呼のころ（3世紀ごろ）のムラの跡が見つかりました。発掘調査では36軒の竪穴式住居の跡や多くの土器・石器が見つかりました。石器の中には石包丁という稲の穂先を刈り取る道具が見つかり、この周辺で稲作が行われていたものと思われます。土器からは、北陸地方や群馬県との交流を示すものも見られました。特に北信や東信地方一帯から出土している土器と共通した文様の土器や赤く塗られた土器が見つかっており、塚田遺跡のムラは、「赤い土器のクニ」という大きなクニの一部ではなかったかと考えられています。



石包丁の使われ方

有斐選書「図解技術の考古学」潮見 浩著



塚田遺跡の弥生土器

(3) 古墳時代の^{こふん}大祭祀場^{だいさいしじょう} 青木下^{あおきした}遺跡

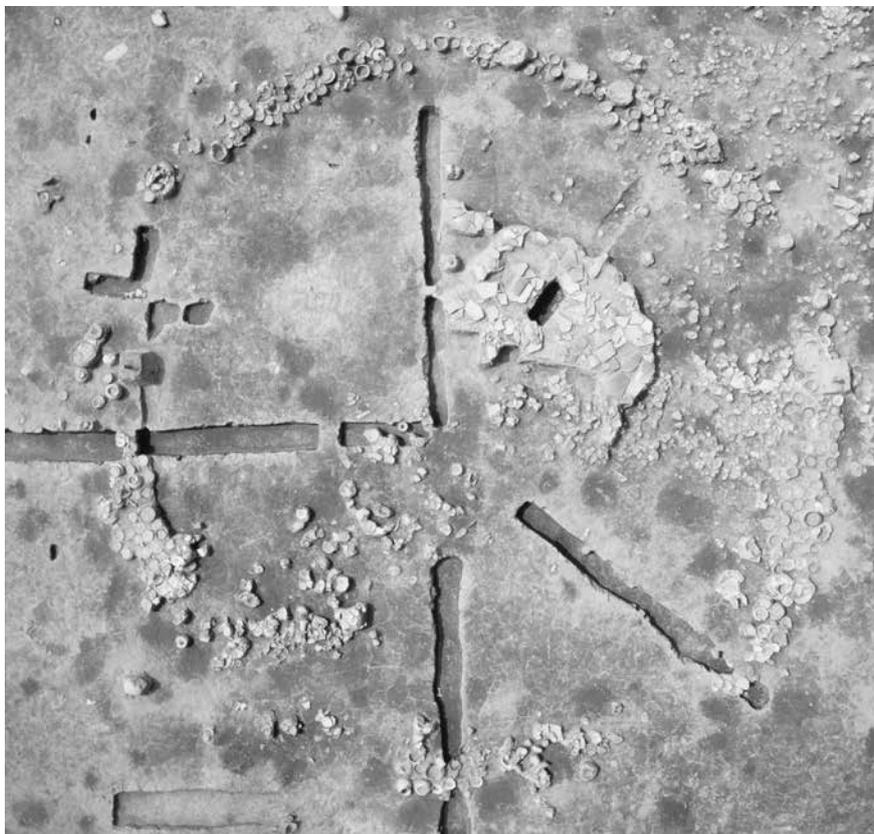
古墳時代という時代名は、当時の支配者であった豪族などの墓を古墳と呼んだことから名づけられました。古墳は4世紀から7世紀ごろにかけて造られ、この時代は前期、中期、後期と3時期に分けられています。

南条地区の鼠宿で見つかった青木下遺跡は、古墳時代後期の遺跡です。この遺跡は当時のおまつりが、どんな様子であったのかを知ることのできる遺跡として、全国的に注目されました。

発掘調査によって、この遺跡では、古墳時代の後期の6世紀から7世紀ごろの約100年の間に、何回ものおまつりが行われていたと考えられています。当時のめずらしい貴重な土器や鉄でできたやじりなどが、数多く見つかったことから、そのおまつりには豪族のような権力のある人が多く集まったのではないかと考えられます。当時の人々が、青木下で何のおまつりをしたのかははっきりわかりません。しかし、おまつりが終わった後、輪になって飲食した土器が、そのまま残されていたことから、おそらく当時は千曲川が何回も氾濫したため、「氾濫が再び起きないように」あるいは「お米が多く収穫できるように」と、川の神様などにお祈りしたのではないかと考えられています。



青木下遺跡で見つかった土器



おまつりが終わった後、円形のまま残された土器

多くの土器が円形に並んだ状態で見つかったのは、全国で初めてのことで、青木下遺跡は、坂城町だけではなく全国でも重要な遺跡と言えます。これらの土器は、発見されたときと同じ配置で文化財センターに展示されています。

(4) 御厨社古墳と前山古墳

古墳時代には、奈良や大阪などの関西地方を中心にヤマト政権が誕生しました。九州から関東・中部以南の豪族たちは、早くからヤマト政権に支配されていったようです。その表れとして豪族たちは、勢力にふさわしい古墳を造り、その古墳が当時の独特な文化となつて今に伝わっています。

古墳の種類には円墳、方墳、前方後円墳などがあり、古墳を上から見た形で名づけています。また、古墳の内部は横から入る横穴式石室と上から降りていくような竪穴式石室があります。千曲市の森將軍塚古墳は前方後円墳で、大きな竪穴式石室が設けられていて、今から約1600年前の古墳時代前期の古墳とされています。

町内には前期の古墳は見つかりません。ほとんどの古墳は、今から約1300年前の古墳時代の後期ごろに造られたものと思われています。町内には約50基の円墳がありますが、御堂川、谷川、出浦沢川など川沿いに集中して見られます。

後期古墳の特徴としては、その古墳に埋葬されている豪族が支配していた場所を見渡せるところに造られていること、埋葬するための入口が横にあるものが多いこと、いくつもの古墳が集中していることが挙げられます。

御厨社古墳は村上地区の上平にある古墳で、御厨社の近くにあります。この御厨社古墳は横穴式石室で石室が千曲川流域で一番大きい古墳とされています。古墳の形は円墳で、石を積み上げて造られています。遺物としては勾玉などがみつかります。

御堂川古墳群は中之条地区の葛尾霊園の周辺にある古墳で、約14基みつかります。その中の前山1号墳は円墳の積石古墳で、横から出入りできるようになっていました。発掘調査の結果、古墳時代だけでなく奈良時代に入ってから、この古墳が使われていたこ



前山1号墳の石室

とが、発見された土器などによってわかりました。遺物としては、土器のほか勾玉や鉄製のやじり、小刀などが見つかっています。

ここでは6遺跡を紹介しましたが、町内にはもっと多くの遺跡があります。遺跡には古墳のように見てすぐわかるものもありますが、多くは地面の下に眠っていますので、ふだんは遺跡があることさえわからないことが多いのです。しかし、注意してみると畑などに土器や石器などが落ちていた場合もあります。この土器などの発見は、過去から未来への重要なメッセージとなっています。今までに行われた発掘調査は、この土器などの発見を手がかりに実施したものです。ですから、当時のことを知るためには、土器などの遺物、竪穴式住居などの遺構といったものは、大変大切なものであることがわかります。

原始・古代という時代は、狩りをしたり、田畑を耕したりして、生活していた時代でした。そのころでも今と同じように、住みやすい場所に家を造っていました。最近の発掘調査によって、坂城町には縄文時代から平安時代までの多くの住居の跡などがみつかっていますので、その当時から坂城町は住みやすいところだったと言えます。

古墳時代には青木下遺跡の周辺が重要な場所でしたが、奈良時代や平安時代の遺跡としては、坂城小学校周辺に住んでいた豪族が建てた寺の跡と思われる込山廃寺があります。中之条地区の坂城中学校や坂城消防署周辺からは、今でいう役場のようなはたらきを持つムラ跡などがみつかっています。以上のことから、町内のいたるところに、重要な場所があったことがわかります。このことは、長い歴史の中で、その時代、時代によって、その場所の使われ方などが違っていたために、重要な場所があちこちにできた結果と考えられます。

みなさんも「ふるさと坂城」の「坂城町の歩み」や「遺跡、文化施設分布図」を参考にして、家の周辺の歴史や坂城町の歴史を調べてみませんか。きっと坂城町は、遺跡が豊かな地域であることがわかると思います。

2 村上氏が活躍した郷土

村上小学校の校歌（作詞：浅井 洌）の2番の歌詞を見てください。これは、古くから村上郷、坂城郷で力を持っていた村上氏の、歴史の一幕を語っているのです。

また、坂城小学校の校歌にも、村上氏にふれた一節があります。

このように坂城町にゆかりの深い村上氏には、どんな歴史があったのでしょうか。

(1) 村上氏のおこり

平安時代の終わりに、京都から流されてきた源盛清という人が、村上地区上平の島に住むようになりました。この人が、村上氏の先祖と考えられています。村上氏の始まりは、今から900年以上も前のことです。

（平安時代末の中御門右大臣 藤原宗忠の日記『中右記』による）

芳野の山の 花と散り
越路の雪に 埋みても
しるきその名は 世に絶えず
残る古城に み社に
今も言いつぎ 語りつぎ
ありし昔を しのぶなり
（村上小学校校歌2番から）

(2) 平安・鎌倉時代の村上氏

県歌「信濃の国」に登場する木曾義仲や、源平の合戦で活躍する源義経の名前はみなさんも知っているでしょう。

貴族の時代から武士の時代に移り変わろうとする平安時代の終わりごろの1183(寿永2)年、村上氏は木曾義仲とともに、七人の有名な大将の一人として京都を守っていたことが、『吉記』（吉田経房の日記）に残されています。1184（元暦元）年の一の谷（神戸市）の戦いでは、村上基国が源義経に従って平家と戦ったことが、『平家物語』などに書かれています。

また、村上頼時・村上義国などは、1192（建久3）年に鎌倉幕府を開いた源頼朝に仕えて、鎌倉に大きな家を建てて住み、頼朝が出かけるときには必ずお供をしていたほど、重要な立場にあったそうです。このように、村上氏は、日本の歴史上有名な人たちとともに生き、活躍していました。

村上地区の上平にある「御厨社」は、村上氏が領地の一部を伊勢神宮に寄付したことから、このころにできたと言われています。村上氏は、村上の家や領地が長く続くように祈りました。このときの建物は、応仁の乱（1467～1477年）のとき、争いの中で焼けてしまったそうです。ですから、今ある建物は鎌倉時代のものではありません。しかし、その後のくわしいことはよくわかりません。



御厨社

(3) 鎌倉時代終わりごろの村上氏

今の中国を治めていた元が二度にわたって北九州に攻めてきた元寇の役〈1274（文永11）年の「文永の役」と1281（弘安4）年の「弘安の役」〉で、十分な恩賞をもらえなかった御家人（幕府に仕える武士）たちの生活は苦しくなっていきました。源3代の後、鎌倉幕府を支配する北条氏への不満が高まりました。こうした中で、幕府を倒し、天皇中心の政治を行おうと考えたのが後醍醐天皇です。その計画は二度も失敗し、天皇は隠岐（島根県）に流されましたが、楠木正成など天皇に味方して兵を挙げる武士があいつぎました。

後醍醐天皇の皇子の護良親王も後醍醐天皇のために戦いましたが、その護良親王に仕えていたのが村上義光と、その子義隆でした。

護良親王は幕府に不満を持つ武士たちを集め、吉野山（奈良県吉野町）にたてこもって戦いました。一進一退の攻防は十日に及びましたが、「もはやこれまで」と思った護良親王は、討ち死にを覚悟し、蔵王堂の前で最後の酒のうたげを開きました。このときに、護良親王をいさめたのが義光でした。

その様子は、『太平記』という物語の第7巻の「吉野の城軍の事」というところに書かれています。次のような様子だったと言います。

義光は、「はやまってはなりません。ここであなたが死なれるのは犬死にというものの、わたしがあなたの鎧を着て敵をだましますから、そのすきに、ここはひとまずお逃げください」と、涙ながらに護良親王を説きふせ、護良親王から鎧をはぎとると、それを自分の身につけました。

そして、護良親王が脱出したのを見届けると、蔵王堂の二の木戸の上にかけるのぼり、「われこそは後醍醐天皇の皇子護良だ。今ここで自害（自殺）するから、最後のありさまをよく見ておいて、お前たちがいくさに敗れて腹を切るときの手本にせよ」と、敵勢に向かってさげびました。

そして言うやいなや義光は鎧をぬぎ、やぐらの下に投げ落としました。そして、着物の胸をおし開き、一文字に腹をかき切り、息たえました。

義光の子の義隆も、この戦いで自害しています。

この間に護良親王は、さらに南の高野山（和歌山県）にのがれることができました。1333（元弘3）年閏2月1日のことでした。

このできごとをしのんで、江戸時代の国学者の藤田東湖が和歌に詠みました。

「死出の山 こゆるも嬉し 天照らす
神の遠裔の 皇子となのりて」

この歌を刻んだ歌碑が、村上小学校の北側に建っています。

村上小学校の校歌2番の歌詞の「芳野の山の花と散り」というのは、こんな村上義光の最後の様子をうたっているのです。



村上小学校の北側に立つ歌碑

これから3年後の1336（建武3）年、後醍醐天皇による南朝と、足利尊氏が立てた光明天皇による北朝が開かれ、半世紀にわたって争う「南北朝時代」が始まりました。

(4) 南北朝・室町時代の村上氏

後醍醐天皇らにより鎌倉幕府が倒されましたが、新政府に抵抗する勢力もありました。村上義光の兄弟と言われる村上信貞は「信濃惣大将」という地位を与えられ、それらの争いを収めました。坂城郷では、1335（建武2）年に北条氏の地頭・薩摩刑部左衛門入道が信貞により攻め落とされました。これ以降、村上郷を拠点としていた村上氏の力が、坂城郷にも及ぶようになっていきました。

鎌倉幕府を倒すとき、後醍醐天皇に味方した足利尊氏が、天皇の政治に不満を感じるようになると、別の天皇を立てて、京都で新しい幕府を開きます。のちに室町幕府と呼ばれるようになり、信濃も幕府の支配下になりました。

1400（応永7）年には、村上満信が東北信の豪族に呼びかけ、幕府が派遣した信濃守護・小笠原長秀を長野市篠ノ井の大塔で破りました。村上氏は、信濃の国を代表する武士として、周辺の豪族をまとめる存在になりました。

(5) 戦国時代の武将村上義清

① 上田原の戦いと砥石（戸石）くずれ

足利氏が治めていた京都の室町幕府の力がおとろえると、各地域に実力のある支配者が出て、自分たちの領地や領民を守るために勢力を伸ばし、お互いに争う時代になりました。これを戦国時代と呼び、100年ほど続きます。

村上義清は、こういう時代に坂木（坂城）に生まれ、善光寺平や上田、さらに佐久の方まで勢力を広げ、北信濃一の力を持つようになりました。

一方、甲斐（山梨県）を統一し、諏訪や伊那、佐久地方も手に入れるなど信濃にも力を伸ばしてきた武田信玄（このころは「晴信」という名前）は、1548（天文17）年にいよいよ北信濃を攻めようとし、雪の積もる2月、大門峠から出馬して上田市の上田原に陣をかまえました。

そこで村上軍は坂木を出発し、2月14日、両軍は激突しました。この戦いの結果、村上軍が勝利し、武田軍は有力な武将が戦死するなど大きな痛手を受け、兵を引きました。これが上田原の戦いです。

1550（天文19）年、信玄は再び北信濃を攻め取ろうとして、砥石（戸石）城（上田市神科）を攻撃しました。これに対しても義清は、激しい戦いの末に武田軍を破っています。このとき、武田軍は戦死者を1000人以上出し、のちに「武田の砥石くずれ」と呼ばれました。

この2つの戦いで、義清は無敵の信玄を破った唯一の武将として有名になりました。

② 川中島の戦いと村上氏

砥石くずれの翌年に砥石城を奪い取り、東北信の武将との結びつきを強めた信玄は、
またも北信濃に攻めてきました。1553（天文22）年には、屋代氏をはじめとする義清の家
来も信玄についたため、義清は葛尾城にとどまるのをやめ、城から抜け出しました。

葛尾城を抜け出した村上義清は、越後（新潟県）の上杉謙信（このころは「長尾景虎」
という名前）に応援を求めました。これによって、上杉謙信は信濃へ出兵し、武田軍と戦
うことになりました。長野市川中島を中心に12年間で5回の戦いがあったと言われ、川
中島の戦いと呼ばれています。

この戦いは、信玄と謙信の一騎打ちなど、物語がたくさん残っています。江戸時代になっ
て描かれた「川中島合戦図屏風」には、村上義清が上杉方の武将と共に戦っている姿が見
えます。



かわなかじま かつせん ずびょうぶ きしゅう
川中島の合戦図屏風（紀州本）

（中央の黒い馬に乗り槍をかまえて武田信繁（信玄の弟）を攻める村上義清が描かれている）

③ その後の村上義清と坂木

上杉謙信の応援を得た村上義清は一時、葛尾城を奪い返したこともありましたが、最後は、上杉謙信に仕え、二度と坂木へ戻ることはなく、1573（天正元）年に越後で亡くなったと言われています。

村上小学校の校歌2番の歌詞にある「越路の雪に埋みても」は、こんな村上義清の生涯を物語っています。

村上義清が坂木から去った後、坂木は武田氏が治めることになりました。しかし、1575（天正3）年、武田勝頼が織田信長の軍に敗れた後、同じ年に信長が本能寺の変で死去すると、上杉氏の家来となった義清の子、村上景国が治めたこともありましたが、わずかの期間で代わりました。その後、上杉景勝（謙信の養子）、豊臣秀吉などが、直接あるいは間接に治め、やがて江戸に幕府を開いた徳川幕府の時代になっていくのです。

ここまでの村上氏の活躍は、「坂木宿ふるさと歴史館」の展示で詳しく学ぶことができます。



田町えんま堂に立つ義清の供養塔（江戸時代（1657年）に建てられた）

3 交通の要所だった郷土 江戸時代

(1) 坂木宿と鼠宿の役目

江戸時代に入り、今の坂城町の区域は1603（慶長8）年に松平忠輝（川中島18万石）の領地となり、その後、松平忠昌の領地になりました。1618（元和4）年には、鼠宿・新地・上平・網掛・上五明の村が酒井忠勝の領地となり、金井・横尾・中之条・坂木など埴科郡の10の村は、坂木5千石として天領（江戸幕府が直接管理する領地）になっていました。その後、坂木5千石は1624（寛永元）年に越後高田藩領に、1682（天和2）年には板倉坂木藩の領地になりましたが、1703（元禄16）年から再び天領になりました。領地を治める陣屋（代官所）は、はじめ坂木村に置かれ、後に中之条村に移りました。このように坂木を中心とした村々は江戸幕府の大切な領地であり、村人たちも「天領の百姓」としてほこりを持って生活していました。一方、鼠宿・新地・上平・網掛・上五明の村は、1622（元和8）年に真田信之が上田から松代に移ったのにもない、松代藩10万石の領地となって明治まで続きました。



坂木宿の様子を表す絵図

また、街道の整備が進む中、1603（慶長8）年ころ北国街道の一宿場として「坂木宿」ができました。宿場の仕事は、はじめ立町と横町だけで行っていましたが、交通が盛んになると、あとからできた大門町や新町なども加わり、仕事を手伝いました。宿場には本陣（大名などが泊まる場所）と、たくさん問屋（荷物を受け継ぐ場所）や旅籠

(旅人が休んだり泊まったりするところ)などが置かれました。宿場の役目は次のようなものでした。

- ・ 前の宿場から来る人や荷物を受けて、次の宿場まで送り届ける。
- ・ 大名行列の武士や旅人を泊める。

記録によると、加賀(石川県)前田家をはじめとする諸藩の大名行列や、佐渡の金・銀や会津ろうの御用荷物の継ぎ送りが重要で大変な仕事であり、村人たちにとって重い負担になっていました。

松代藩では鼠宿村に藩独自の宿場を置き、藩主や家臣の旅の世話や荷物の受け継ぎの仕事に当たせました。また、上田藩領との境には口留番所を置き、旅人や物資の動きを取り締まりました。

(2) 用水と農業

① 六ヶ郷用水

用水路の水は、生活に使ったり、田畑に引いたり、火事の火を消したりするために使われていました。江戸時代の記録によると、網掛・上平・上五明・力石・新山・上山田の六村を流れる六ヶ郷用水は長さが約8.7km、水を送っている田畑の面積(かんがい面積)が約305haあり、この地域の人たちの生活を長い間支えてきています。

この用水が、記録に初めて出てくるのは、1567(永禄10)年の大須賀文書です。当時から用水を維持・管理するために堰守が置かれていました。

水は千曲川から取り入れていたため、洪水のたびに取水口(取入れ口)が流されたり、用水路が土砂で埋まったりしました。1612(慶長17)年には、当時松代城代であっ

た花井吉成が、2年間かけて大改修を行ったと言われています。1742(寛保2)年の大洪水(戊の満水)は、千曲川流域のほとんどの田畑や用水路が土砂に埋まってしまうほどで、上五明村では村全部が水に浸かったばかりか、58人ものが亡くなる大被害を



小網地区を流れる六ヶ郷用水



1952(昭和27)年に建てられた村上村外二ヶ村用水取入口完成記念碑



六ヶ郷用水の取水口

受けました。千曲川の洪水ばかりでなく、大雨が降ると出浦沢川も土砂を押し出し、用水を土砂で埋めてしまうことがたびたびありました。六村では、網掛村から選ばれた堰役を中心に、毎年の定例請（土木工事）のほかに、臨時の普請を行って日ごろから用水を守る努力を続けたのです。取水口は洪水のたびに上流へ場所を変えて、今は上田市下半過に取水口が造られています。近くに建つ3つの六ヶ郷用水改修記念碑からは、洪水との戦いの歴史がよくわかります。

坂城側にも江戸時代の初めに欠口用水（中之条用水）が造られました。欠口用水は、今も南条・中之条の水田地帯に水を運ぶ重要な役目を果たしています。

② 江戸時代の農業

江戸時代の産業は、農業が中心でした。水田で稲、裏作として麦が作られ、畑で麦、木綿、野菜（大根・なす・芋・かぶなど）、豆、粟、稗、そば、たばこが作られていました。

鼠宿村の吾妻銀右衛門は小網に新しく畑を開き、桑の栽培を始めました。これをきっかけに松代藩は養蚕を勧め、網掛村、上平村などでも盛んとなり、1827（文政10）年、蚕を飼うための家（蚕家）を持っていた農家は網掛村に5軒もありました。また、江戸時代の終わりごろには蚕種（蚕の卵）を売る人が、今の坂城町内にはたくさんいました。

たばこは横尾村の「玄古たばこ」が知られています。江戸の初期に武蔵国児玉郡今井村（今の埼玉県本庄市）出身の往海玄古という僧が、薩摩（今の鹿児島県）から持ってきたたばこの種をまいて栽培したのが始まりで、地域の特産物になりました。

杏は松代藩が勧めたこともあって、これも上平村や網掛村に多く植えられていました。

一方、上五明村の農家は千曲川の川原などの畑を利用してサツマイモを作り始めました。1839（天保10）年には、サツマイモ栽培を広めた新右衛門がその働きを認められ、松代藩からほうびをもらうほどでした。取れたサツマイモは上田城下に持って行って売っていましたが、上田方面の村に反対され、1847（弘化4）年に「芋騒動」と言われる争いになったこともありました。



玄古たばこ



たばこの包丁

4 ひら きょうど めいじ たいしょうじだい 開かれる郷土 明治・大正時代

(1) よこぶきしんどう 横吹新道づくり

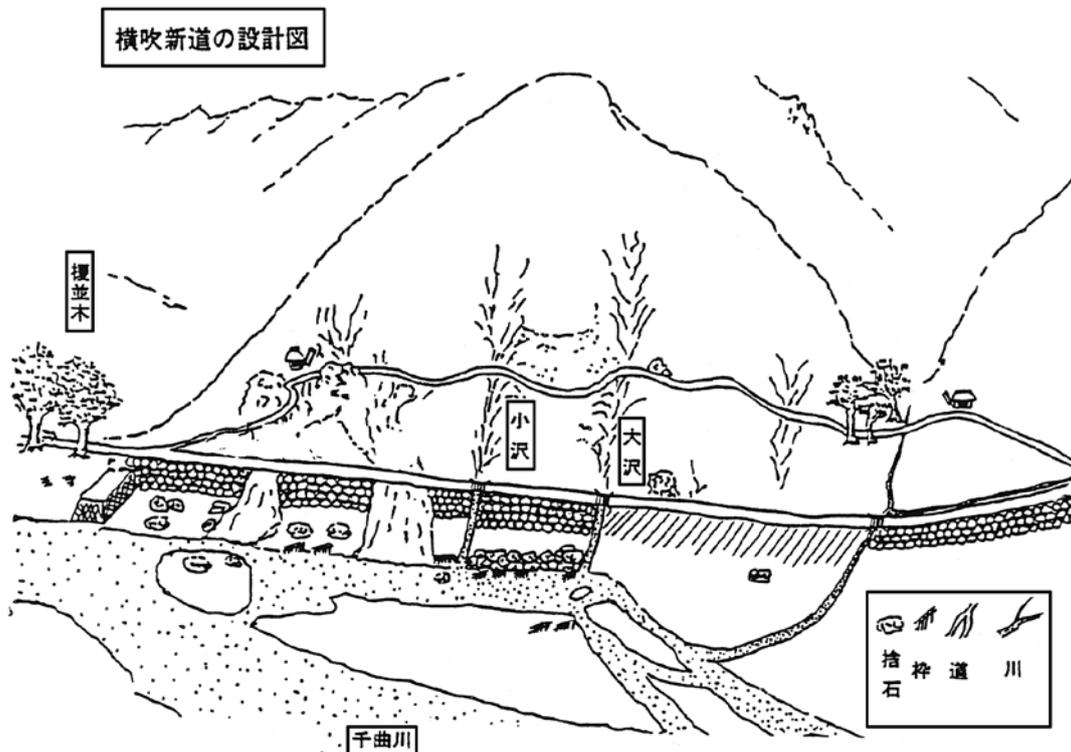
明治になると人々の往来が自由になり、商売や仕事で上田や長野方面と行き来する人々が増えてきました。しかし、坂木から戸倉へ行くために通る「横吹坂」は依然として険しい道のため人々は大変困っていました。

そこで1876（明治9）年4月、坂木村は長野県令（今の知事に相当する職）に次のような願い書を出しました。

北国街道の横吹坂は、高い山の中腹を通っている険しい道で、山の下は千曲川がつきあたって急な流れとなっている。風雨や雪の日には人や馬がたびたびけがをしたり、中には落ちて死ぬ人もいたりして大変困っている。そこで荷車や人力車なども通行できる平らな道を横吹坂下の千曲川の川縁につくりたい。どうかみんなのためになる新しい道づくりを許可していただきたい。

この願いは同年5月に県から国へ出され、同年8月に「今ある横吹坂の道はこわさないで、いつでも通れるようにしておくなら、新しい道をつくってもよい。」と、国から許可されました。

地元の人たちが考えた新しい道は次の絵図のようなものでした。



(坂城町公民館報『さかき』262号から)

新しい道路づくりには坂木村の人々が交代で出て岩落とし、石運びにと協力しましたが、苦勞なことがたくさんありました。例えば、山をくずすための火薬をたくさん用意できなかったため、かたい岩に木のくさびを打ち込み、水をしみこませて岩を割ったりしました。洪水で割り落とした大石や泊まり用の小屋、仮の道などが流されたこともありました。また、道路づくりによって千曲川の流れが変わり、水害にあうことを心配し、工事に反対する人もいました。

しかし、「安全で便利な道がほしい。」という熱い思いによって1877（明治10）年ついに横吹新道が完成しました。翌年9月8日には、明治天皇巡幸の大行列がこの道を通して善光寺に向かいました。

6か年間は有料道路で、通行料は、一人7厘、馬一疋1錢4厘でしたが、これによって馬車、牛車、人力車なども通行できるようになりました。

（2）おらが村の学校

明治政府は、すべての国民を学校で学ばせようと1872（明治5）年に「学制」を公布しました。小学校へは6歳で入学し、下等・上等小学を8年で学ぶというものでした。1873（明治6）年、中之条村と横尾村は、西念寺を仮の校舎にして、格致学校を開校しました。この年鼠宿村と新地村は精成学校、金井村は金井学校、坂木村は坂木学校、網掛・上平・上五明・力石・新山・上山田の6ヶ村は力石村に六郷学校を開いています。

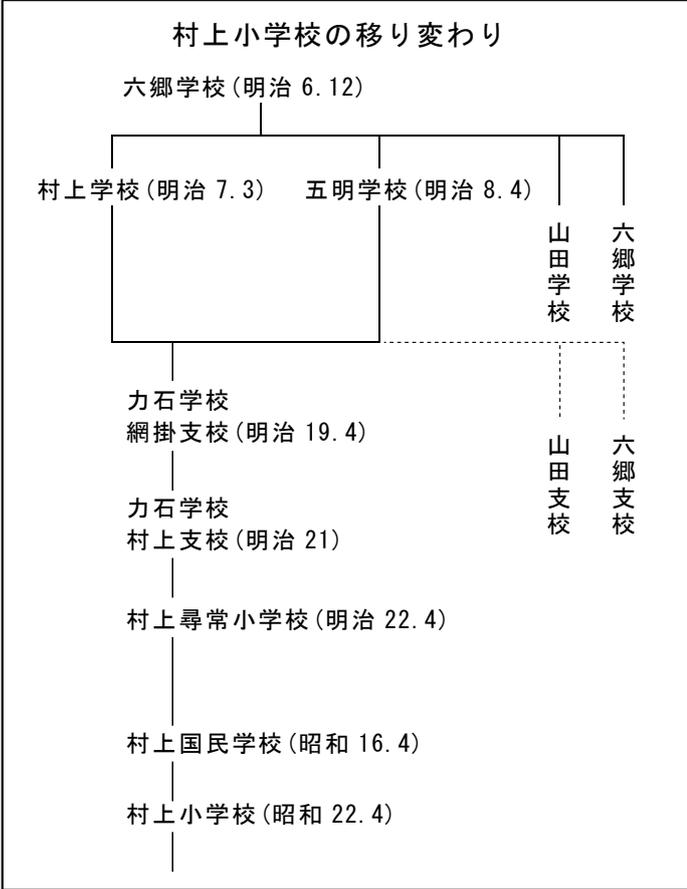
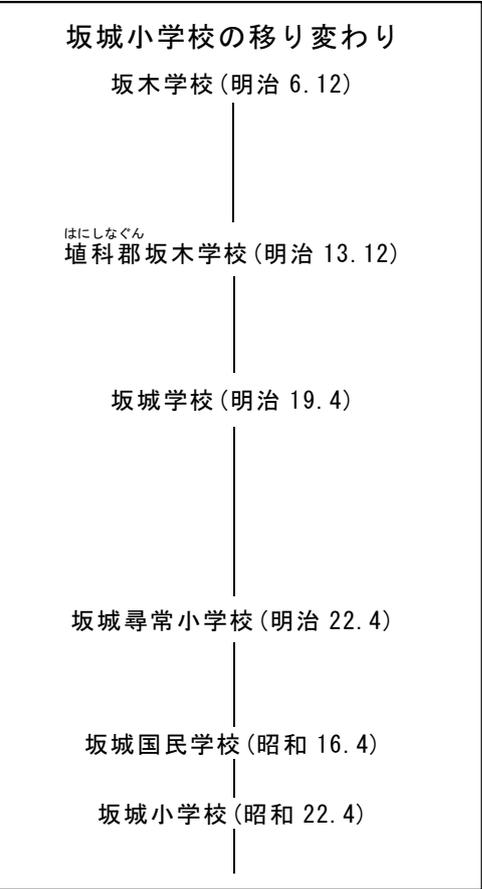
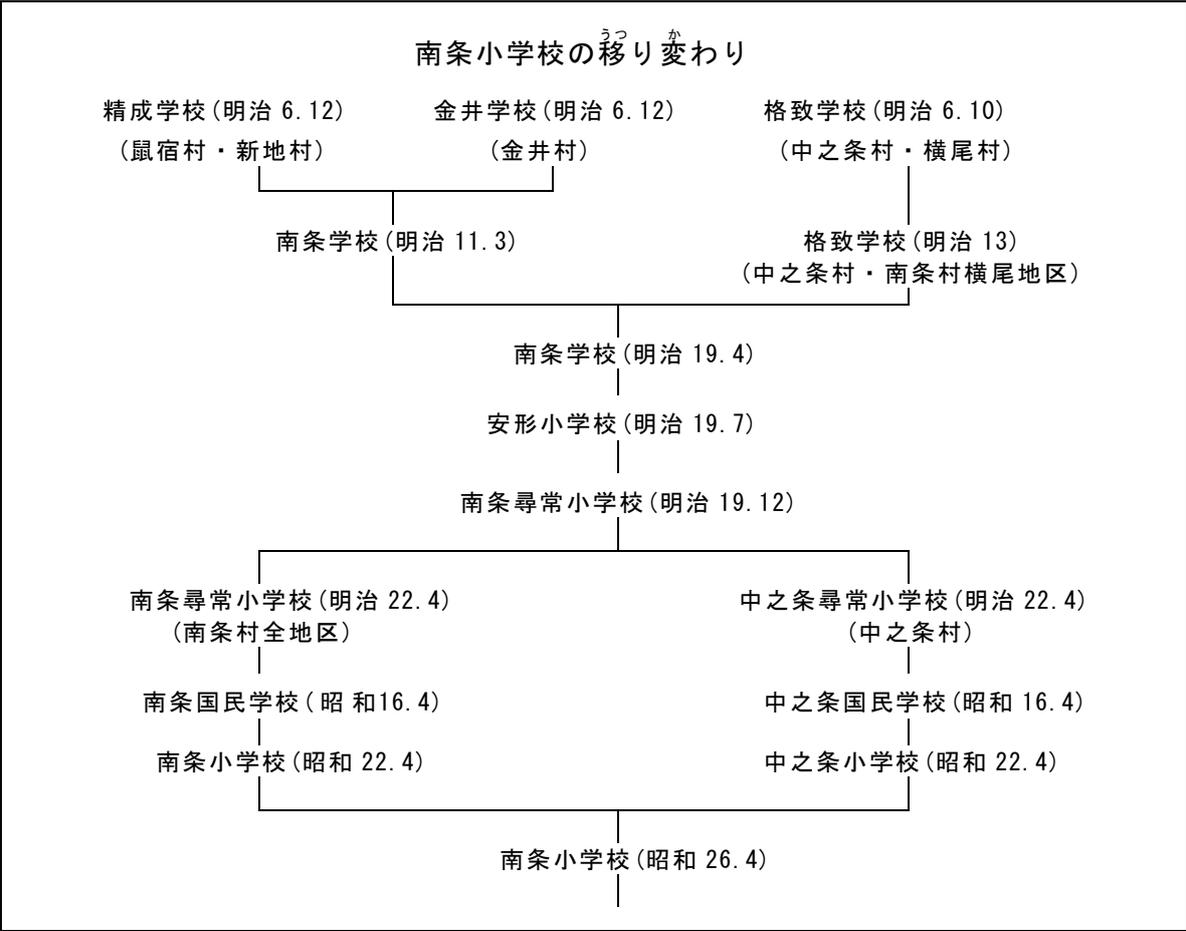
なお、網掛村と上平村は1874（明治7）年に村上学校、上五明村はその翌年に五明学校を設立し、六郷学校から分かれました。

学校はいずれもお寺や民家を仮の校舎に始まったので、狭くて不便でした。そこで、中之条村と横尾村は格致学校の校舎を新しくつくることにし、1381円余りをかけて1878（明治11）年に完成させました。そして、1983（昭和58）年には図書館の隣の今の場所に移されました。格致学校は、村人たちが気持ちをこめて最新の西洋の建築様式を取り入れ、正面入り口のアーチ、洋風のガラス入り引き戸の窓・扉などにその特徴が表れています。

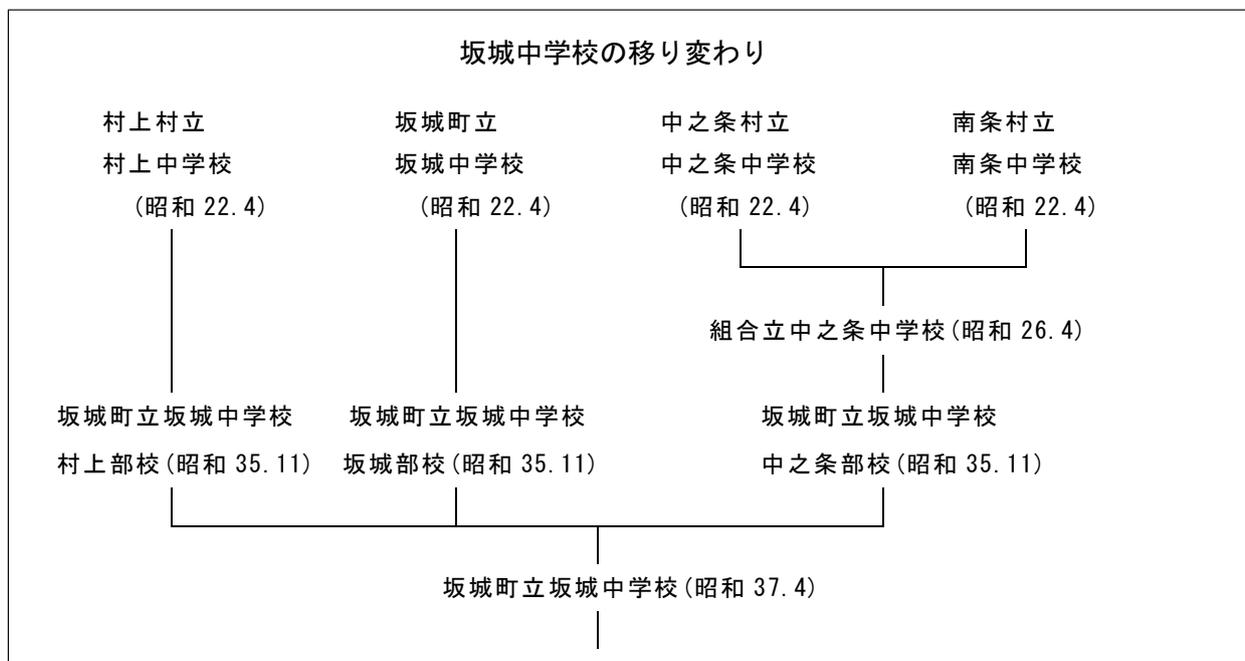
校舎を建てる費用や学校で使う費用は、村人たちが自分たちで出しました。このため村人の負担は重く、学校へのお金を払えなかったり、子どもが家の仕事や子守りをしなければならなかったり、また学校に行かなくてもよいと考える親もいたりして、学校へ通うことのできない児童はたくさんいました。

坂木学校の場合、1876（明治9）年に学校へ通っていた児童は、男子62.4%、女子27.5%（県平均63%）でした。このほか卒業しないでやめてしまう子どもも大勢いました。しかし、学校で学ぶ教科も裁縫・唱歌・手工・歴史・地理・理科と順々に加わったり、教育の大切さが理解されたり、学校が整備されたりしてくる中で、明治の終わりごろ、1911（明治44）年には、100%近くの子どもたちが学校へ通うようになりました。

1886（明治19）年の「小学校令」により、小学校は、尋常小学校と高等小学校の2段階になるようになり、尋常小学校は義務教育となりました。



町や村の中学校ができたのは、1947（昭和 22）年になってからです。南条、中之条、坂城、村上の 4 地区それぞれに中学校が設置されました。その後、1951（昭和 26）年に南条中学校と中之条中学校が中之条中学校に統合され、1960（昭和 35）年には中之条中学校、坂城中学校と村上中学校が現在の坂城中学校一つに統合されました。最初は旧校舎のままの 3 部校制でしたが、1962（昭和 37）年 4 月に、坂城中学校が今の場所に新築開校されました。



明治の終わりごろ、さまざまな産業が発達してくると、農業生産を上げるための高い技術を学ぶ学校をつくってほしいという願いが高まってきました。そこで、1910（明治 43）年、坂城町、中之条村、南条村が力を出し合って、農業や養蚕の技術を学ぶ組合立の学校として埴南農蚕学校（坂城高等学校の前身）を開校しました。この学校には、3 町村だけでなく村上村や近くの町や村から、小学校を卒業した多くの人たちが入学しました。学んだ人たちは、地域の農業やさまざまな産業の担い手として活躍しました。また、町村長をはじめとする指導者も育ち、この地域の発展に果たした役割は計り知れないものがあります。1942（昭和 17）年、立町から今の御所沢に移転し、1944（昭和 19）年には学校名を坂城農業学校と改め、さらに 1948（昭和 23）年長野県坂城農業高等学校としました。そして、1951（昭和 26）年、学校名を長野県坂城高等学校に改めました。地域の人々の願いと力で生まれた坂城高等学校の卒業生は 1 万人を越え、坂城町のあらゆる方面で活躍しています。

現在（2020 年）、坂城高等学校には 10 クラスがあります。「自らライフキャリアをデザインし、地域社会に主体的に関わり貢献できる人の育成」をめざして毎日の教育活動を行っています。クラブ活動や生徒会の活動も盛んです。また、「地域や社会に貢献できる人材の育成」を目標に、生徒が町のいろいろな行事に参加したり、町の人々の意見を生かしたりする努力を続けています。今でも坂城中学校から大勢の生徒が進学する高校であり、坂城町の地域高校として重要な役割を担っています。

坂城高等学校の移り変わり

長野県組合立埴南農蚕学校 (明治 43. 4)

長野県埴南農蚕学校 (大正 9. 8)

埴南^{じっかこうみん}実科^{へいせつ}公民学校を併設 (大正 13. 4)
併設の埴南実科公民学校を^{はいし}廃止 (昭和 2. 3)
坂城町^{さかきまちごしよざわ}御所沢^{いてん}に移転 (昭和17. 11)

長野県坂城農業学校 (昭和 19. 4)

中学校を併設 (昭和 22. 4)
併設中学校を^{はいし}廃止 (昭和 23. 3)

長野県坂城農業高等学校 (昭和 23. 4)

定時制^{ていじせい}を併置 (昭和 23. 5)
設置者^{せつちしや}を長野県^{へんごう}に変更 (昭和 24. 4)

長野県坂城高等学校 (昭和 26. 1)

定時制^{ほしゆう}募集^{ほしゆう}を^{はいし}廃止 (昭和 53. 3)
定時制^{ほしゆう}閉校 (昭和 56. 3)



埴南農蚕学校跡の碑 (立町)

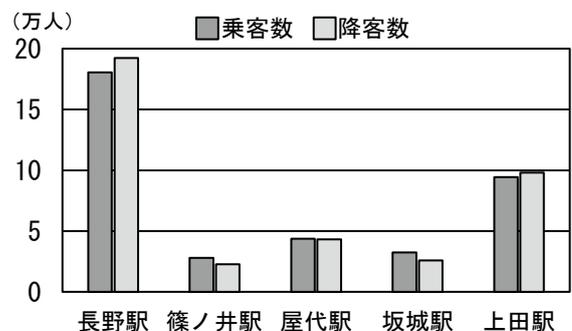
(3) 信越本線の開通と輸送

坂城^{さかき}停車場^{ていしゃじやう} (以下、駅と表す) は 1888 (明治 21) 年 8 月 15 日、信越本線^{しんえつほんせん}一部開通とともに開業しました。信越本線は、まず群馬^{ぐんま}県の高崎^{たかき}—横川^{よこかわかん}間が 1885 (明治 18) 年 10 月に開通しました。同じ年の 5 月から直江津^{なごえつ}—上田^{かみ}間の土地の広さや高さが測られ、7 月には工事が始まりました。そして新潟^{にいがた}県の直江津^{せきやま}—関山^{せきやま}間、関山—長野^{ながの}間、長野—上田^{つぎつぎ}間と次々に開通し、1888 (明治 21) 年直江津—軽井沢^{かるいざわ}間の開通となったのです。1893 (明治 26) 年には碓氷^{うすい}トンネルの完成で高崎—直江津間が^{ぜんつう}全通し、東京^{きんぎや}まで汽車で行かれるようになりました。そのころ、長野—上田間には篠ノ井^{しののい}・屋代^{やしよ}・坂城^{さかき}の 3 つの駅が置かれただけでした。駅の設置場所をめぐって、南条鼠宿^{みなみじよう}と坂木村^{あらか}とが争いましたが、結局坂木村に決まったといういきさつもありました。



昭和初期の坂城駅

各駅の利用人数 (1889年)



(『坂城町誌下巻歴史編』から作成)

1889（明治22）年の長野—上田間の乗り降りしたお客の数（乗降客数）を見ると、その当時は坂城駅の方が篠ノ井駅よりもたくさんのお客が利用していたことがわかります。

坂城駅の乗客数は1895（明治28）年には5万人を越し、荷物（貨物）もたくさん運ばれるようになりしました。1907（明治40）年に坂城駅から送り出した貨物量は、合計で371トンでしたが、1913（大正2）年には、合計830トンと6年間に約459トンも増えました。送り出された荷は木材と繭が多く、蚕業と林業の人々が坂城駅を利用していたことがわかります。まだ工業はこの地域に発達していませんでした。

その後の乗客数を見ると、1915（大正4）年約88000人、1917（大正6）年約114000人と増え、1926（昭和元）年には約184000人を数え、当時の坂城町人口の18倍もの人々が利用しました。降客数もほぼ同じ増え方をしています。

こうした乗降客数や貨物の増加にあわせて、1919（大正8）年に駅舎を改築し、大きくしました。また1923（大正12）年には通過列車に対する信号機を設置したり、電灯や電話を新しく引いたり、ホームを長くしたりして設備を充実させました。

信越本線は「日本国有鉄道（国鉄）」が営業していましたが、1987（昭和62）年に民営の「JR東日本」の経営になり、さらに1997（平成9）年、長野新幹線の開通に伴って「しなの鉄道」に変わりました。

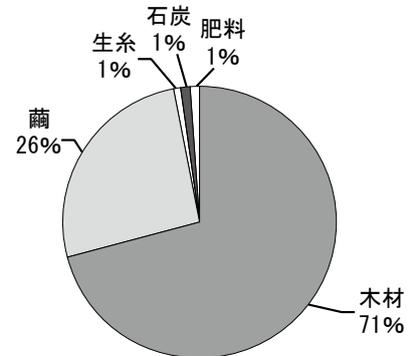
（4）盛んだった養蚕業

「養蚕」とは蚕を飼い、絹糸のもととなる繭玉を作ることです。蚕は桑の葉しか食べませんから、畑に桑を作り桑の葉をとっては蚕に与えます。やがて蚕は口から細い糸をはき、繭玉を作ります。繭玉は製糸工場に出荷されて生糸をとります。日本で作られる生糸は品質がよく、海外でもとても人気でした。生糸は江戸時代の終わりから日本の重要な輸出品となっていました。

明治から昭和の初めにかけて、日本各地の農村は養蚕が盛んに行われました。特に長野県は全国でも有数な繭や生糸の産地でした。

坂城町でも養蚕が盛んに行われ、1885（明治18）年の記録では南条、中之条村の農産物全体の約38%の生産額があり、養蚕は農家にとって重要な現金収入でした。

坂城駅から送り出した貨物の割合（1913年）



（『坂城町誌下巻歴史編』から作成）



桑の葉を食べる蚕



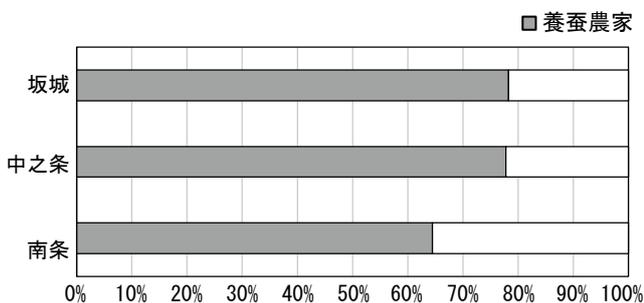
繭を作る様子

（『坂城町誌下巻歴史編』から作成）

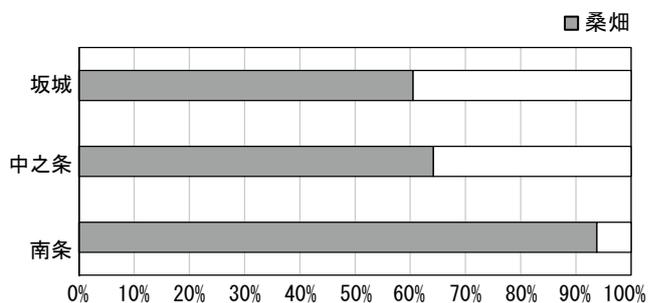
1886（明治19）年には蚕糸業組合がつくられ多くの農家で桑を栽培し、蚕を飼育し繭玉を出荷しました。1922（大正11）年の記録を見ると、養蚕をしていた農家が大変多く、畑の多くが桑畑でした。また、前のページの坂城駅から送り出した貨物でも繭がその4分の1を占めています。これらのことから、養蚕は当時の坂城町を支えた重要な産業であったことがわかります。

現在は桑畑のほとんどが果樹園に変わり、養蚕を行う農家は坂城町にはありません。しかし、よく見るとぶどう畑のすみに桑の木がまだ残っていたり、家の物置や倉庫にかつて養蚕に使った道具が残っていたりと、坂城町では養蚕がとても盛んであったことを知ることができます。

1922（大正11）年の農家に占める養蚕農家の割合



1922（大正11）年の畑に占める桑畑の割合



（『坂城町誌下巻歴史編』から作成）

（5）千曲川の改修と昭和橋

何度となく大洪水を起こし、被害を出してきた千曲川の治水改修工事は沿岸住民の願いでした。江戸時代にも大草堤防や常山隄などの治水工事が行われていましたが、本格的な治水改修工事は、1917（大正6）年から始められました。この工事は小県郡城下村（現在のの上田市）上田橋から下高井郡高丘村立ヶ花（現在のの中野市）までの56.5kmもの大規模なもので、内務省土木局新潟出張所が直接工事を管理して、進めました。工事は1941（昭和16）年までかかりましたが、この堤防の完成でこれまでのような洪水の不安は少なくなりました。

このことと一緒に千曲川に橋を架ける計画が進められました。村上村の人々は、対岸の坂城町へ行くには渡し船か下流の笄橋を利用するよりほかありませんでした。そこで船を新しくする必要に迫られた1927（昭和2）年に橋を架けることを要望し、前年開通の鼠橋を参考にして、それよりしっかりした橋を架ける計画を立てました。費用は県から45%を補助してもらい、橋までの道は上五明区が受け持つことで、工事が始まりました。

こうして1928（昭和3）年に橋が完成し、「昭和橋」と命名されました。木橋でしたが、坂城町と上五明区間の行き来は大変楽になりました。



昭和橋の完成を祝う人々（1928年）

5 戦争の中での郷土 昭和時代

(1) 青い目の人形

「青い目の人形」とは、1927（昭和2）年にアメリカの子どもたちから日本の子どもたちへ贈られた友情の人形のことです。日本全国の小学校に12739体、長野県ながのけんの小学校には286体の人形が贈られました。坂城町さかきまちの3つの小学校にも、それぞれ人形が贈られました。

人形は学校で大切に保管され、子どもたちにとって特別な友達となりました。日本からはそのお礼にとアメリカへ「答礼人形」が贈られました。

ところが1941（昭和16）年、太平洋戦争が始まり、日本とアメリカが戦争をするようになると、青い目の人形は「敵の国の人形」として、その多くが壊されたり、捨てられたりしてしまいました。

しかし、中には大切に残されたものもあり、現在、長野県には29体の人形が残っています（全国では305体）。そのうちの1つが村上小学校にあり、1978（昭和53）年の村上小学校校舎改築のときに発見されました。今でも村上小学校では平和と友好の人形として大切に保管されています。

2004（平成16）年、県内の小学校などが協力して、長野県からアメリカへ贈られた答礼人形「長野絹子」の里帰りが実現しました。長野絹子は青い目の人形とともに長野県の各地をまわり、「鉄の展示館」でも展示されました。



村上小学校の青い目の人形

(2) 満蒙開拓移民

1930（昭和5）年に世界的な経済不況になると、日本の農村の経済の中心である養蚕業も大きな損害を受け、農家の生活は大変苦しくなりました。そのような中で、農村の経済の立て直しや食糧を増やすことを目的に、国は満州国（現在の中国の東北部）に開拓の移民を送り出す計画を進めようとしたのですが、実際は軍事上での必要性がありました。

移民計画は1932（昭和7）年ころから実施され、1936（昭和11）年には、20年間で100万戸、500万人の移民計画が発表されました。しかし、1937（昭和12）年に日中戦争が始まり、実現がむずかしくなりそうになると、1938（昭和13）年からは、満14～18歳までの少年で組織する「満蒙開拓青少年義勇軍」の送出計画が出され、国は募集を始めました。

「満州に行けば20町歩（約20ha）の土地が手に入る」といった宣伝や教員による生徒の満蒙開拓青少年義勇軍への勧誘、地域での説得などにより、1945（昭和20）年までに約30万人もの人が満州国に渡ったとされています。長野県は中でも数が一番多く、開拓団として約3万人、義勇軍として約7千人もの人が送り出されました。

満州国に移民した人々が住んだ建物や開拓の土地のほとんどは、前からそれを使っていた現地の人々から安く買い上げたものでした。そして、現地の人を小作人として使ったり雇ったりという形のもが多く、現地の人からはうらまれることが多くなりました。開拓地では、出身の地域ごとに開拓団をつくり共同で農業に励みました。

坂城町関係の人数

各地区	総人数(人)	男(人)	女(人)
坂城町	69	48	21
村上村	79	40	39
中之条村	38	21	17
南条村	29	17	12
合計	215	126	89

(『長野県満州開拓史名簿編』から作成)

移動して行ったため、満州国を守る補助として開拓団の男性が兵隊に集められました。そのため、開拓地は女性や子どもだけになり、農業の経営はますます苦しくなりました。

1945(昭和20)年8月には、ソ連が戦争に加わり軍隊が満州国に攻め込んできました。更級郷や埴科郷やの人々は、日本軍からの指令を受け、住んでいる土地から逃げ出しましたが、果てしなく広い満州国の土地に食べるものはなく、飢えと恐怖と疲労の中、大勢の人が亡くなっていきました。また、敵につかまる前に与えられた手りゅう弾や銃で自ら命

坂城町関係の年齢別生死者人数

年齢(歳)	総人数(人)	日本に帰れた人(人)	亡くなった人(人)	日本に帰っていない人(人)
0～9	44	9	34	1
10～19	49	20	28	1
20～29	55	37	17	1
30～39	30	13	16	1
40～49	17	3	14	
50～59	5		5	
60～69				
70～79	3		3	
不明	12	4	8	
合計	215	86	125	4

(『長野県満州開拓史名簿編』から作成)

坂城町でも200人以上の人が満州国に渡りました。しかし、坂城町出身の人が多く入った「更級郷」と「埴科郷」は、ソ連との国境近くで、生活するには厳しい原野であったり凍った土の多い場所であったり、開拓作業も困難でした。

1941(昭和16)年、太平洋戦争が始まり、やがて戦争が激しくなると、満州国の日本軍の多くは、南方の戦場に

を絶ったり、親が子どもを殺して自分もすぐに後を追って自殺したりするような悲惨なことも起きました。

1945(昭和20)年8月15日に終戦を迎えましたが、その後も悲惨な状態は続き、約8万人の人が亡くなったと言われています。坂城町でも開拓団の人で無事日本に帰国できたのは、215人中86人だけでした。

(3) 学童集団疎開の受け入れ

1941（昭和16）年、国民学校令が出され、それまでの尋常小学校は国民学校に変わりました。国民学校は心身をきたえ、国のため天皇のために身を捧げることが求められました。

太平洋戦争中の1944～45（昭和19～20）年にかけて、坂城地域の国民学校（小学校）は、東京などから戦争の被害を避けて移ってきた疎開児童を受け入れました。

坂城町へは1944（昭和19）年8月に、東京都豊島区西巣鴨町の時習国民学校の5・6年生の児童が集団疎開してきました。6年生男子35人の宿泊所には満泉寺が当てられ、教員1人、寮母2人、炊事婦（食事の世話をしてくれる人）2人が世話をしました。5年生60人（男子35人、女子25人）は大英寺で生活し、教員3人、寮母5人、炊事婦3人が世話をしました。寮母や炊事婦は、地元の人々が務めました。授業は坂城国民学校の特別教室などを利用して行いました。

疎開児童の着るものや布団などは各自が持参しましたが、食糧を用意したり運んだりする仕事は、坂城町役場が担当しました。

疎開児童の日課（大英寺5年生）

6:30	8:00		18:00	21:00	
←〈寮〉		←〈学校〉		←〈寮〉	→
就寝	朝礼 掃除 朝食	3時限 の授業	昼食	1～2時限 の自習・ 自由時間	夕食 自習
					就寝

（「坂城町誌下巻歴史編」より作成）

村上村には同じ豊島区の池袋第二国民学校の児童125人が疎開し、福泉寺に45人、源忠寺に35人、西教寺に45人とそれぞれ分かれて生活しました。村上国民学校では、各組に疎開してきた児童を分けて受け入れました。炊事は村上村の婦人会員が交替で担当し、入浴も各家で2人ずつ引き受けるなど地元住民が協力し、村民と疎開児童との交流も見られました。中之条小学校や南条小学校にも個々に疎開してきた児童が何人かいました。

疎開児童の生活は、親と離れて生活する不安に加え、食べ物も十分にあるとはいえ、「大豆入りのご飯で、米粒も少なく、おなかはずく一方で、学校の帰りにくわの実を採って食べたり、小麦を口の中でもぐもぐさせたりしながら帰った。」という話もあります。しかし、つらい思いをしている疎開児童に対して地元の高等科生徒が木出しの作業を手伝ったり、アケビをとってあげたりすることもありました。また、近所の川で泳ぐことを覚えたり、山登りをしたり、竹を曲げたスキーやスケートで遊んだり、都会の生活では味わえない自然とのふれあいも多くありました。

1945（昭和20）年8月の敗戦^{はいせん}で疎開児童たちは東京などに帰っていましたが、疎開した人たちは、のちに「東京坂城会」をつくったり（2010年に解散^{かいさん}）、村上小学校の音楽会に招かれたりして交流を続けました。（坂城町出身^{まね}で関東地区^{かんとう}において活躍^{かつやく}している人の「東京坂城会」は今も続^{つづ}いています。）

2012（平成24）年には、学童疎開していた方々を坂城町に招き、交流会が行われました。このとき、3つの小学校に「学童疎開の碑」という記念碑^ひが建てられました。



学童疎開の記念碑（坂城小学校）

（4）疎開工場

「工業^{こうぎょう}の町坂城」がつくられ始めるのは、1941（昭和16）年に宮野鑛工場^{みやの やすりこうじょう}（今のアルプスツール）が東京から坂城町へ移ってきてからです。宮野鑛工場が移るきっかけは、社長が長野県に来たときに「将来は農民^{しやうらい}に工場^{こうじょう}で働^{はたら}いてもらえるように、農村^{のうそん}に工場を建てた方がいい。」という話をしたことからです。そこで当時の坂城町では、宮野鑛工場を町に招きました。その後、戦争^こが激しくなると、次の表に見るような工場が坂城町へ疎開^{はげ}にきました。

坂城町へ疎開してきた主な工場

1943（昭和18）年	日本発条坂城工場 ^{ぜんまい}
1944（昭和19）年	大崎製作所坂城工場（今の長野大崎製作所） 都筑製作所 ^{つづき}
1945（昭和20）年	日置電機 ^{ひ おきでん き} （後に上田市へ移る）

これらの工場は、初め^{はじ}は、航空機^{こうくう}や通信部品^{つうしん ぶ びん}など戦争^{かんけい}に関係あるものをつくっていましたが、敗戦後は、機械^{き かい}、金属製品^{きんぞくせいひん}の工場^かに変わっていきました。

また、今の坂城町を代表する工場も戦後まもないころにつくられました。

1944（昭和19）年	栗林製作所 ^{くりばやし}
1946（昭和21）年	柳沢螺子製作所（今のKYB-Y S） ^{やなぎさわ ね じ}
1947（昭和22）年	日精樹脂製作所（今の日精樹脂工業） ^{にっせいじゆし}
1949（昭和24）年	寿製薬 ^{ことぶきせいやく}

そして、工場と協力し部品をつくる地元の町工場^{はってん}が発展^{たが}しました。お互いに助け合い、知恵^{ち え}を出し合って発展を続け、今のような全国にほこれる坂城町の工業をつくり上げてきました。